
背中の荷物 / 銀魂 / 沖神

弥子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

背中の荷物 / 銀魂 / 沖神

【コード】

N2936I

【作者名】

弥子

【あらすじ】

初投稿よろしく願います^^

沖田 神楽な感じです。どうか皆様が少しでもお楽しみいただけますように^^

世間は夏休みの話題でもちきりという今日この頃。
太陽は容赦なく江戸の町を照らし続けていた……。

「……あちイ土方コノヤロー……」

真選組一番隊隊長沖田総悟は、お決まりのごとく、いつものように駄菓子屋のベンチの前でさぼりほうけていた。その口には、先ほど手に入れたであろうソーダ味のアイスバーがくわえられている。ミンミンと鳴り響く蝉の大合唱とジリジリとした太陽の視線を浴びながら、沖田は空を仰いだ。

あまりの暑さにジャケツトを脱ぎ自分の肩にかけたそのとき、駄菓子屋の陰で一人うずくまっている少女の姿が目にと留まった。頭にぼんぼりをつけチャイナ服に身をまとっているその少女……それが神楽の姿である事に気付いたのは、そう時間がかからなかった。

「……どうしたんですかイ。お嬢さん」

喧嘩でも売り飛ばしにいこうか……そう考えた沖田であったが、神楽の様子がどうもいつもと違うのである。

『……なんだヨ。お前か……』

力ない返事に、沖田は眉をしかめた。

「なんだよとはなんでイ。……お前、いつもの傘はどうしたんですア」

『……銀ちゃんと喧嘩して……そのまま飛び出してきちやっ
たアル……』

「……馬鹿ですかイ？アンタ……」

そう言つと、肩にかけていたジャケットを神楽の頭に勢いよくかぶ
せた。

『何すんだヨ……』

「それがぶつて帰りなせえ」

『……嫌アル。汗臭いネ……』

「我慢しろイ」

夜兎族にとって日の光がどれだけ体にさわるものか、沖田はよく理
解していた。

それに、いつもと様子の違う神楽を見ると、心配でたまらない。
……。

『こんなのかぶつて帰るくらいなら、自力で帰った方がましヨ……』

神楽はふらつく足取りで立ち上がり、数歩前に進んだかと思うと、
後ろによるめき体制をくずしてしまった。案の定、それを支えたの
は沖田であった。

「ばーか。顔色悪イんでイ」

そう言つて、もう一度ジャケットをかぶせたかと思うと、しゃがみ
こみ神楽に背中を向けた。

「今日だけ背中貸してやらァ……」

『……何か、今日のお前変アル。……おかしいアル』

やわらかい、温かいものが沖田の上に覆いかぶさったのと同時に、彼の心臓は大きく脈打った。
本当は喧嘩なんかじゃなく・・・
あふれる想いを押さえつけ、沖田はゆっくりと立ち上がり歩きだした。

『本当は嫌ヨ。お前におんぶなんて』

「そりゃあ奇遇でイ。俺もお前に背中貸すこつたア、ごめんこつむりますぜ」

『・・・じゃあなんで貸したんだヨ・・・』

「今だけは真選組の人情つてやつにしといてやらア・・・」

『・・・私、お前の背中嫌いヨ・・・』

「そーかい」

『血の匂いがするアル』

「そーかい」

『銀ちゃんの方か、おつきくて、いつも甘い匂いがするネ・・・』

「そーかい」

『だから・・・銀ちゃんの背中好きヨ』

「・・・そーかい」

ああ・・・コイツすっげー軽いなあ・・・。

あれから月日は流れすっかりはだ寒くなってしまった江戸は、木々が紅葉をすませ、とんぼが飛び交い、夕日が一段と輝かしい季節へとうつり変わっていた。

「・・・寒イ土方コノヤロー・・・」

ポケットに手を突っ込み背中を丸めて歩いている沖田は、やはり今日も仕事をサボるために町をぶらぶらと歩きまわっているのだった。しかし、今日は手ぶらではない。

『おい！隣にかわいいレデイと一緒に歩いているのに、なんだヨそのマダオみたいな歩き方は！』

「・・・レデイ？いったいどこにいるんですア・・・」
『ここにいるだロー！』

「あー・・・やべ。小さすぎて見えやせんでした」

『・・・お前本当ム力つくネ・・・罰として万事屋までおんぶするヨロシ』

「はア？何で俺が・・・」

と、否定する暇もなく、神楽は沖田の背中にひょいと飛び乗った。

「・・・重」

今日は手ぶらではない。きつとこれからも手ぶらではないだろう。

『レデイに向かって重いと何なんだヨ』

「すいやせんねィ・・・」

重い、大切な、小さいけれど大きな荷物が出来た。

離れられない、離しちゃいけない、たとえ運ぶのが困難だとしても。

『でも、私おまえの背中大好きヨ』

そういつて離れようとしなない荷物が、こんなにも愛おしいと思うのだから。

「知ってませア」

(後書き)

まだまだ未熟者ですね〜 これからもかき続けていこうとおも
うので、感想などございましたらぜひお願いしますm()m
ここまで読んでいただき本当に感謝しております。本当にありが
うございましたッ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2936i/>

背中の荷物 / 銀魂 / 沖神

2010年10月15日18時10分発行